

---

# 東方見幻記

カルフェ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方見幻記

### 【Nコード】

N4660X

### 【作者名】

カルフェ

### 【あらすじ】

妖怪である主人公が幻想郷の中でほのぼのやっていく、そんなお話。  
気まぐれで更新していきます。

## 日常の出来事。(前書き)

この小説は東方projectの二次創作です。  
独自解釈、キャラ崩壊、矛盾、その他もろもろの危険要素が含まれて  
います。

それでも構わないという勇者な方はそのままお進みください。

## 日常の出来事。

今日も何も起こらない。

朝食に、魚を釣って食べた。

腹も膨れたので、人里で働く。

少し暇だったので博麗神社に立ち寄って、

霊夢と魔理沙と共にお茶を飲んだ。

巫女の癖に妖怪退治をせずにいて大丈夫なのだろうかとも思ったが、  
霊夢が言うには「特に害もないので大丈夫」らしい。

魔法の森をぶらぶらと歩いて、腹が減ったので妖怪を殺して、食べた。

人間はどうも食べる気がおきない。

硬い筋が多くてあまり好みではない。

そこがいい、とかほざいている人食いの気がしれない。

家に帰って昼寝をして、

ちよっかいを出してきた妖精をどこかにぶっ飛ばした。

夜になったのでまた働いて、

そのあと家に帰って寝た。

今日もいつもどおりの平凡な日だった。

平凡なのは良いが、さすがに長時間生きていると退屈になってくる。  
そろそろ何か面白いことが起きないだろうか

日常の出来事。(後書き)

今回はかなり読んでスッキリしない内容になりました。

この後の展開は決まっています。

主人公の能力も決まっています。

名前すらも決まっています。

こんな手探りで大丈夫か私・・・

基本的にはのぼのとやっついていこうと思います。

短くて申し訳がない・・・

しかし『残酷な描写』なんて入ってくるだろうか・・・？

嵐の前の静けさ（前書き）

まだ何か異変を起こす気がない

## 嵐の前の静けさ

翌日。

まだまだ寝足りなかったが、仕事もあるので渋々起きる。朝食を済ませてから人里へ向かう。

「お、仁志<sup>ひとし</sup>。今日もよろしくな。」

私が働いているのは寺子屋。牛・・・もといワーハクタクの慧音のところだ。

と言っても特別何かを教えるわけでもなく、侵入者を追っ払うという地味な仕事。

・・・要するに、門番である。

ただ、寺子屋に門番が必要かというと、（必要ないんじゃないか・・・？）と時々思う。

泥棒に入る奴なんていないだろうし、人里の中だから妖怪が襲うこともない。

だが、噂では「昔ここで妖怪によって大惨事が起こされた」らしい。もっとも、慧音にはそのことは聞いていないが。所詮ただの噂だ。

ちなみに、仁志は偽名である。

昼になって交代の時間になった。こういった気遣いのできる慧音に感謝だ。

ずっと一人で門番してる人もいるらしいしなあ・・・さすがにそんな大変な人は居ないだろう。ただの噂だし。

暇だからぶらぶらと宛もなく散歩をしていると、聞き覚えのある声があった。

「はあ・・・またあなたですか」  
「お、椀か」

犬走椀。白狼天狗だそうだ。よく知らないが、某記者のパシリとか噂されてる。

しかし相変わらずモフモフの尻尾である。・・・切り取ってお持ち帰りしちゃダメだろうか。

「何か悪寒がしたんですけど」  
「気のせいだろ」

あんなこと考えていたとは口が裂けても言えない。

「あつ、そんなことより！なんでまた入ってきてるんですか!？」  
「どこに?」  
「妖怪の山に決まってるでしょ!!ただでさえ色々大変なのに!」  
「・・・げげっ!」

そう。なぜ私が椀の名前を知っていたか。それは私がこの散歩の時に、毎日のように妖怪の山に入ってしまったからだ。

この前入ったのは・・・一昨日か。学習能力ないな私。

「この前もう『入ってこない』って言ったのは何だったんで・・・あれ?」

椀がなにやら言っているが、気にせずに逃げる。

この前入ったときはフルボッコにされた。  
学習しない私じゃない!

そう思いながら、一目散で妖怪の山を逃げ出した。

「はあく逃がしちゃった・・・ま、いいか。結局出ていったし」

椀は一人ため息をついた。

「まったく、あの人は毎日のように・・・あれ？  
そう言ったあと、ふと気づく。」

「あの人の名前、なんて言うんだろう・・・」

「フウ・・・酷い目にあいかけた」  
自分の家に帰って一息つく。

なんで私が、白狼天狗如きにフルボッコにされるのだろう。  
そこそこ長い間生きているのにね・・・  
「ま、原因は判ってるんだけど・・・」

幸いその日は夜の仕事もなかったので、ぐっすりと眠った。  
ちなみに翌日。

私は再び妖怪の山に入ってしまった、フルボッコにされた。  
結局学習できてないじゃん。

## 嵐の前の静けさ（後書き）

能力については、あと二話ぐらいで明らかになるかもしれません。  
ならないかもしれません。  
なんとという手探り更新。

妖力（前書き）

主人公がなぜ、椼にあっさりやられたのかわかる・・・かも

## 妖力

椛にフルボッコされた二日後。いつものごとく、寺子屋の門番を終えた私は、博麗神社へ歩いていった。

理由はもちろん、「暇潰し」である。あそこに行けば、何かしら面白いことがある。

それともうひとつ、もっと深刻な理由もある。

腹が減っていたので、襲ってきた妖怪を殺し、皮を剥いで焼いて食べた。

「うまいんだけど、妖力は増えないんだよな・・・」

妖怪の肉はそのままよりも焼いたほうが断然うまいが、焼くと妖力の増加は0に等しくなる。

そんな妖怪の肉を、どうしてわざわざ焼いて食べているのか。答えは単純。

「人里に行くのに、妖力増やしたら警戒されるだろうしなあ・・・」

人里の人間は、妖力を見ることができない。それはもはや、生き抜くための第一条件になっている。

それはそうだ。魍魎廻渦巻く幻想郷で、妖怪と人の区別も付けないようでは生きていけない。

そんな人里に、妖力を持った私が行くとどうなるか。当然一瞬で妖怪だと見抜かれる。

そんなことになったらまずい。だから妖力を増やさない。

そしてこれは、深刻な方の理由のもとになっていることでもある。

神社にたどり着き、とりあえず参拝。賽銭を入れる音に反応し、霊夢が飛び出してくる。

「誰、誰！？お賽銭入れてくれたの、誰！？」

「よう」

「なんだ、あんたか」

ひどい言われようである。

「何しにきたのよ」

「暇潰し」

「帰れ」

もう一度言おう。ひどい言われようである。

「それと封印について」

そう言うと、霊夢がピクリと反応する。

「何かあったのかしら？」

「この封印、解いてくれないか？」

## 妖力（後書き）

なんの封印かは・・・まあわかりますよね？  
能力については、まだまだわからないかもです  
バトルさせて初めて出すつもりなので・・・

「この世の全てはだいたいお金で解決する

「封印を解け、ねえ・・・」

「ああ。霊夢ならできるだろう?」

封印があると、妖力を全く出せなくなる。そうになると、万が一侵入者に気がついてても、撃退しきれないということが起こり得るのだ。

「封印してくれっていったのはあんたなのよね」

「まさかこんな影響があったとはな・・・」

「ちよつと考えれば分かることでしょう? 全くマヌケねえ」

「マヌケで悪かったな」

封印についてさっぱり知らなかったのだから仕方がない。仕方がない!

「ま、封印解くくらいなら出来るけれども・・・」

「お、本当か?」

「あんた、人里には入れないわよ?」

「・・・」

「まさか、そんなことも考えていなかったの?」

そうだった、封印解くと妖力も元に戻るんだった・・・

「全く、? 以下ね」

「返す言葉もございません・・・」

自分のアホさ加減に泣きたくなる。

「ま、封印解かず別の対策でも考えることね」

「例えば？」

「少しは自分で考えなさいよ・・・」

そう言いつつ、いろいろな方法を教えてくれる霊夢に感謝。

三時間が過ぎ。

「今日は色々教えてもらってすまなかったな」

「まったくよ、お賽銭もつかい入れてから行きなさいよ？」

「はいはい」

そう言いつつ、さっきの三倍の量の賽銭をいれる。

霊夢の目がキラリと輝く。

「また、相談にでも乗ってあげるわよー」

そんな霊夢の声を聴きつつ、私は夜のバイト先へと向かった。

謝罪&主人公解説(前書き)

長時間ほったらかしにしてしまっ  
て申し訳ありませんでした。

## 謝罪&主人公解説

仁志（以下仁）「さて、なんで11日間もほったらかしにしていたのか、教えてもらおうじゃないか？」

作者（以下作）「あー・・・ええと・・・なんといいですか・・・」  
仁「・・・はつきり言ってもらおうか？」

作「は、はいっ！幻想郷についていろいろと調べていました！」

仁「お前が無知なせいで、読者は一週間以上待たされたんだぞ？」

作「はい。私が悪かったです・・・」

一時間後

仁「説教飛ばしやがったな」

作「作者説教パートは読んでいても面白くないでしょうし」

仁「じゃあなぜ作ったし」

作「反省していることを示したかったんですよ！」

仁「示せてないよな」

作「聞こえない聞こえない。」

仁「だから誠意が伝わらないと・・・」

作「さて、そろそろ設定を公開しようと思っんですが」

仁「それは賛成だな。」

作「物語の途中でちよくちよく公開しようと思ってたんですが・・・」

仁「お前の腕前じゃ無理だろ」

作「耳が痛い・・・」

仁「まあ、そんなわけでここで設定公開するわけだな」

作「設定分からずにイライラした人も多いと思いますので」

仁「お前の技量が低いせいだな」

作「ちよっと、それはひどいですよ」

仁「さっさと公開しろ」

作「はいはい」

仁志（本名不明）

種族：妖怪

性別：なし

能力：液体を操る程度の能力

身長：一般人程度

仁「これほど突っ込みどころの多い設定は初めて見たな」

作「これは一応、ワケありで」

仁「まず、最初の本名不明ってなんだよ」

作「仁志が忘れてるだけです」

仁「嘘だろ」

作「そのうち本名知ってるキャラ出すから許して」

仁「許さねえよ。次だ。性別：なしってなんだ？」

作「そのまんまです。状況次第で、男にも女にもなれるわけです」

仁「つて、俺なんの妖怪なんだよ」

作「これも今は言えないから許して」

仁「はあ…全く」

作「まあ、こんな感じですね」

仁「何も解決してない気がするが・・・」

作「まあ、モヤモヤしてた人にとってはよかったんじゃないかと」

仁「これからはこんなこと無いようにしろよ」

作「努力はする」

## 謝罪&主人公解説（後書き）

長期間ほったらかしにしておいて申し訳ありませんでした！  
東方の設定を実はよく理解していないことに気がつき、  
幻想郷の何から何まで、調べ尽くしたつもりです！  
これからはちよくちよく更新していくつもりです。

一人の迷子（前書き）

異変？の始まり。

## 一人の迷子

次の日。

寺子屋へ行くと、予想外の張り紙があった。

『本日はお休みです。』

「休み…？昨日までどう見ても健康だったんだが…」

そのときは（風邪かなあ）と思い、何も気にしなかった。

ぼんやりと散歩をしていると、遠くから聞き覚えのある声が出てくる。

「ああ、もう！なんでこんなに妖怪がわくの!？」

誰の声だろうかと思って近づくと…

「こんな大変なときに限って入ってくる!」

「え？」

椀だった。

「何度山に入ってきたら気が済むんですか!？」

おかしなことを言っている。

「妖怪の山にはまだ入ってないんだけど？」

むしろ人里の方が近いくらいである。

「…え?」

きよとんとする椀。そして周りを見渡して一言。

「…どこですか、ここ?」

一人の迷子（後書き）

キャラクターがなかなか動いてくれずに、こんな遅い投稿になりました。

申し訳ありませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4660x/>

---

東方見幻記

2011年10月28日15時06分発行